HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	生産的労働論新考
Author(s)	荒又, 重雄
Citation	北海道大學　經濟學研究, 25(3), 1-22
Issue Date	1975-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31320
Type	departmental bulletin paper
File Information	25(3)_P1-22.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

生産的労働論新考

荒又重雄

一

マルクスは，古典派経済学者とくにアダム・スミスの理論を批判的に受けついで，生産的労働の科学的に正確な概念をうちたてた，としばしばいわれる。しかしまた，マルクスの生産的労働論が，とくにそのいわゆる本源的規定と資本制的形態規定との関係をめぐって，理解に必ずしも容易なものでないこともひろく認められている。

戦後わが国におけるこの問題の論議は，一つには国民所得論に関連して展開している(1)。現代資本主義で肥大化した第三次産業，サーヴィス業の意義を，国民所得との関係でどう考えるべきか。この点に現代資本主義批判の重要論点を認めるべきではないか。そういった問題意識が流れている。いま一つには，この問題は労働力の搾取との関係で関心をもたれ続けている。いわく，サーヴィス業の労働者は搾取されているといえるか，等々。賃銀斗争の基礎づけ，労働者階級の主体的編成の把握，そうした目的が問題意識の底に存在している。

ところで，近年とりわけあらわとなってきた資本制的生産の危機の態様は，一つにはブルジョア的ＧＮＰ信仰の動揺であり，いま一つには生産力賃銀説あるいは支払能力説にもとづく利潤と実質賃銀との並行的上昇への信仰の動揺である。これは，第二次産業，物的財貨の生産の増大さえもが必ずしも国民の福祉の増大を示さないことを考えさせるものであり，また，労働者は充分に搾取されているのであるから安心して若干の取りもどしを要求できるのである，といった理解では賃銀斗争も組めなくなりつつあることを反省させるものである。こうした時代にあっては，生産的労働論は，いま少し違った

視角から再考さるべき余地があるように思われる。

あたらしい視角はどこに求められるであろうか。それは，マルクスの周知の規定を吟味しなおすことである。いわく，生産的労働とは「労働の内容または労働の成果からではなく，労働の一定の社会的形態から生ずる，労働の一規定である」。「資本を生産する労働だけが生産的労働である」。「資本制的生産のいみでの生産的労働は，……資本家のための剰余価値を生産する賃労働である[2)]」。

物的財貨をつくり出すか，あるいはサーヴィスか，といった区別は，さしあたりは労働の内容または労働の成果からする区別にとどまるのではないだろうか。労働の一定の社会的形態からする区別に上昇するためには，少なくとも，たとえば商品価値は抽象的人間労働の凝固物であるのだから，一つの物，外的対象物の形態をなす物的財貨は商品価値を体現しうるが，流動的な労働の姿態にとどまるサーヴィスは商品価値を体現できない，という主張に移る必要がある。

「生産的」という表現は，種々の用途にむけられている。そして，そのさい，「生産」の目的は何か，という問への答が，暗黙のうちにしろ前提されている。あれは生産的だ，とか，これは生産的でない，とかいった日常用語について反省してみれば，困難なく自覚されうることである。ところでブルジョアは資本制的生産に，これを超歴史的な，自然状態そのものと思いこむほどに，固執している。マルクスは冷静に，「資本制的生産のいみでの生産的労働は」，と限定づけて問題としている。とするならば，生産的労働論は，もちろん一定の役割をもつことは否定しないが，そもそも資本制的生産を批判する軸点としては限界をもつものなのではないだろうか。

生産的労働概念を検討するさいには，さらに，人間的労働の唯物論的意義について反省しておく必要があろう。すなわち，社会は人間行動の外枠となるが，それとともに，その外枠そのものが人間の行動により産出されるものである。いわゆる労働価値説は，決して単なる価格決定論の一種ではないし，商品価値の量的規定性についての学説にとどまるものでもないのであって，

商品価値という形態を成立させるものが労働の特殊社会的形態であることを明らかにするものなのである。商品価値が抽象的人間労働の凝固物であることを明らかにするにとどまらず，なぜ抽象的人間労働がその凝固物の姿ではじめて社会的形態を与えられるかを，商品をつくり出す労働の独自な社会的性質から明らかにするのである。これと同様にして，資本の概念の基礎には生産的労働概念があり，生産的労働こそが資本を生み出すもの，資本という社会的形態を支えるものとされているのである。

このような視角から，生産的労働概念について考えなおしてみたい。

1）野々村一雄『国民所得と再生産』,金子ハルオ『生産的労働と国民所得』,赤堀邦雄『価値論と生産的労働』など。

2）マルクス『剰余価値学説史』,長谷部文雄訳，青木文庫版第２分冊，217頁,215頁，209頁。

二

いつもはマルサスに対して厳しいマルクスが，この問題について次のようにのべていたことは，ひろく知られている。いわく，「マルサスが正当にのべているように，生産的労働と不生産的労働のこの批判的区別こそ，全ブルジョワの経済学の基礎なのである[3]」,と。それではマルサスはどのようにのべていたのか。

マルサスの『経済学原理』では第１章が富と生産的労働についての論議にあてられている。マルサスはそこで，富を土地からえられる純生産物に限る重農主義者たちと，人間にとって有用かつ快適なものとして欲望されるもの一般へと広げるローダデールとをともに批判し，スミスの意を汲んだものとしての自分の定義を，「人類に必要で有用なまたは快よい物質物（material objects）[4]」と与えている。つづいてマルサスは，生産的労働とは富を生産するような労働のことである，とし，たとえ富が人間の幸福の唯一の源であると主張できないとしても，また生産的労働と不生産的労働の分類に若干の「正確さの欠如」をみとめなくてはならぬとしても[5]，スミスの見解を採り入れる

必要のあることを次のように主張するのである。

マルサスはいう，「第1に資本は……分業および機械の使用にとって絶対的に必要」であり，「国富の増進におよぼすその広大な影響は，議論の余地なく実証されている」のであって，生産物が資本として用いられるか収入として消費されるかは，生産物によって「維持される労働の種類がちがうことによって生じてくる」のであるとすれば，2種の労働の区別は重要である。第2に，「年々節約される生産物」が資本を増加させるのだが，もちろん貯蓄はたんなる退蔵ではない。だが「もし召使の労働が，製造業者の労働と同じく富を生産しうるならば，なにゆえ貯蓄は，ただ浪費されぬばかりかさらに価値をふやしつつ，召使の維持に用いられないのか。」第3に，もし2種の労働の区別がなければ，「われわれは，なにゆえにある国民が繁栄しているのにほかの国民が衰退しているのかの原因を追求することができないであろう。また，宮廷の仕臣や多すぎる貴族が勢力を占めている国と比べて，商工業者の多い国の富がまさっていることを，はっきり説明することができないであろう。」そんなわけで，生産的労働と不生産的労働との区別は，「明らかにアダム・スミスの著作の礎石（コーナー・ストン）である」，と。[6] マルサスはこれにつづけて，「生産的および不生産的ということばに替えるに，より多く生産的およびより少なく生産的ということばをもってする」スミスの修正を試みているが，これには触れないでおく。ともあれマルサスは，国富の増進のためには資本が決定的に重要であり，資本を資本たらしめているものこそが生産的労働なのだとのべているのである。

マルサスはスミスにならって，「生産的労働ということばは土地に用いられた労働にかぎるべきであるという見解」すなわち重農主義者の見解を批判している。「同じ面積と人口とをもつ2つの国は，同じ数の農業労働者をもつであろうし，土壌の耕作に同じ分量の熟練と資本をふり向けさえするであろう，しかも，この2国のうち，一方の人口の残りの大部分が商工業者からなり，そして他方が召使および兵士からなるならば，前者は富のあらゆる指標をもつであろうし，後者は貧困のあらゆる兆候をもつであろう。それゆえ，

農業労働者の数は，それのみでは国富を規定しうるものではない。われわれは明らかに，商工業の資本および熟練の成果にも言及するところのある生産性の定義を求めている」[7]，と。リカードォとの対立においては土地所有を代表することになったマルサスも，ここでは土地所有に対して資本の立場にある。

有名な『序説』においてマルクスは，労働一般という概念の形成史を回顧し，富を客体的な貨幣の姿にのみみた重金主義についで，重商主義が主体的な金もうけ活動に視点をうつし，重農主義は労働を富の創造者とみるにいたるが，そこではまだ農業と農産物に限定されており，スミスにいたってはじめて，生産物一般と労働一般が把握された[8]，とのべていた。ここにおいては，重農主義は重商主義の否定として位置づけられている。問題がブルジョア的富が次第に支配的位置についてゆく過程において展開されているとみられるから，いま一歩，剰余生産物と剰余労働一般が把握されてゆく道筋として考察すれば，重農主義の否定的役割は次のようにも位置づけられよう。貨幣の形態でブルジョア的富が土地所有から分離した当初には，分離はしても，全体としては中世的富の寄生物にすぎない。剰余労働は圧倒的に地代の形態をとり，必要労働は農民家計の中で圧倒的に自給自足の形態にある。地代の一部分は土地貴族の召使の維持にむけられ，彼らは自分の労働生産物およびサーヴィスを自分の主人に提供する。地代の一部と農民の必要生産物のごく一部とが商業世界の中に入る。この場合には，商人や製造業者たちは，土地貴族たちの「召使」のごとくである。商業世界での剰余価値も，地代からのおこぼれにすぎない。

こうした関係のなかでは，一方ではたしかに封建的富から分離した貨幣財産は存在するが，しかし生産物の観点から反省すれば，農民だけが生産的労働者であり，商工業者たちは地代により賄われる不生産的労働者の姿であらわれる。ブルジョア的富は，どうしても今一歩発展し，土地所有をも自らにくみこまなくてはならないし，少なくとも農業労働から特権的地位を剝奪しなくてはならない。そのためには，商業世界の商工業者たちが土地貴族の召使いよりも生産力的に優位にたち，扶持賃銀的報酬ではなく，剰余労働部分

への支払いも含む価格をかちとらなくてはならないし，農民の必要労働部分にも大幅に喰いこみ，彼らを商業世界に結びつけなくてはならない。それらが達成されたとき，剰余価値は決して単なる地代への寄生物ではなく，立派に剰余労働一般によって直接に基礎づけられるものとなり，生産的労働も農業労働の排他的独占物ではなくなり，土地所有からはなれて資本を成立させるそれへと変身するのである。こうしてみると，重農主義の見解のなかには，中世的土地所有を支える生産的労働の概念(日本でも「士農工商」であった)の最後のあらわれがあった，とも位置づけられるであろう。

生産的労働概念が，中世的なものから資本制的なものへと変貌してゆく過程に，奢侈の性格をめぐる論争がみられるのは興味深い。奢侈が土地貴族の召使いたちによっては支えられなくなるや，奢侈の発展は剰余生産物における都市ブルジョアの分前の増大となり，土地貴族の経済的基礎の弱化となるからである。ジェイムス・スチュアートは，論争を,「奢侈は国家の繁栄と両立しない，というものがある。他方ではまた，奢侈は国民の福祉と幸福の源泉だ,というものがある」,とまとめ,奢侈について,「人間の労働もしくは工夫によって生産されたもので，われわれの生活感情または生活の趣味に媚び，われわれが十分に食うためにも，着るためにも，天候の不順から身をまもるためにも必要でなく，またわれわれを害することができるあらゆるものからわれわれの安全を保障するためにも必要でないものの消費」,といった，やや批判的な定義を与えている。[9] これに対してフランスの『百科全書』は,「奢侈は，いつの時代でもモラリスト達の雄弁の題目であった。かれらは奢侈を知的にではなく，より多くの偏屈さで非難した。また奢侈はしばらく前から若干の政治家たちの賞讃のまととなっている。かれらは哲学者または国政をあずかる人間としてよりも，むしろ商人または手代として奢侈について語っているのだ。」とまとめ，かつ，「奢侈とは，快適な生活をえるために，富や勤労を使用することである」と，やや好意的な定義を与えている。[10]

奢侈をもっとも積極的に擁護したものに，デイヴィット・ヒュームがあったように思われる。ヒュームはいう，「世界のあらゆる物は労働によって購

買される。そして労働の唯一の原因はわれわれの諸欲望である。ある国民が製造業や機械的技術に富むときには，農民だけでなく土地の所有者も，農業を一つの科学として研究し，かれらの勤労と入念さとを倍加する。かれらの労働から生ずる剰余生産物は失われることがなく，製造品と交換されて，いまや人々の奢侈がかれらに渇望させる諸々の財貨を得させる。このようにして，土地はその耕作者の必要を満たすよりもはるかに多量の生活必需品を供給する。」もし，「剰余生産物を，自分たちの快楽ないし虚飾に役立ちうる財貨と交換することが全くできない」ならば，「おのずから安逸の風習がひろまり，「土地の大部分は未耕のままに放置される。」また，このいみで商工業は，国家が危急のさい「だれの生活必需品をも奪わず要求できるような種類の労働を貯える」役にも立っている。たしかに「不道徳な奢侈」も存在するが，しかし「産業活動と諸技術が栄えている時代には，人々は絶えず仕事に従事し，労働の果実である快楽だけでなく，仕事じたいをもその報酬として享受する。精神は新しい活力を獲得し，その力と能力とを増大する。そして実直な産業活動に精励することによって自然な欲望を満足させるだけでなく，安易と怠惰とに養われたさいに通常生ずる不自然な欲望の成長をも妨げる」，と。[11]

スミスは周知のようにヒュームと親しかった。そしてマルサスはスミスを次のように評価している。いわく，「怠惰な仕臣をかかえる趣味および召使を雇う浪費が封建時代から今日にいたるまでヨーロッパの大土地保有者のあいだでつづいていたとするならば，そのさまざまの王国の富は現在とはちがっていたことであろう。アダム・スミスは，われわれの祖先が個人的サーヴィスのかわりに物的な便益品および奢侈品にたいして嗜好をましてきたことがこの変化のおもな原因であったと正しく述べている」，と。[12]

土地所有に対立して資本を擁護しようとする理論的努力と並んで，商品生産一般の立場から資本を合理化しようとする努力があったことも忘れられない。スミスも，「初期未開の社会」における等労働量同士の交換を，理論的展開の出発点においていた。この問題では，有名なジョン・ロックの議論を

おもい出しておかなくてはならない。すなわち曰く，「たとえ地とすべての下級の被造物が万人の共有するものであっても，しかも人は誰でも自分自身の一身については所有権をもっている。これには彼以外の何人も，なんらの権利を有しないものである。彼の身体の労働，彼の手の働きは，まさしく彼のものであるといってよい。そこで彼が自然が備えそこにそれを残しておいたその状態から取り出すものはなんでも，彼が自分の労働を混えたのであり，そうして彼自身のものである何物かをそれに附加えたのであって，このようにしてそれは彼の所有となるのである。」「ひとが耕し，植え，改良し，開墾し，そうしてその産物を使用し得るだけの土地は，その範囲だけのものは，彼の所有である。彼は自分の労働によって，それを，いわば共有のものより自分自身に囲い込むのである」，と。[13)]

みられるように，ここでは，封建的土地所有に対立して勤労人民的な所有が対置されているとともに，勤労者たちの共有に対立して私的な所有が対置されている。論理の要は「自分自身の一身についての所有権」という考え方であり，独立自営農民その他の立場にもとづいて中世的な人格的支配を自然でないものと拒否するとともに，勤労人民の一人一人の商品経済的対立を超歴史的なものと受け入れているのである。

さて，スミスに戻ることにして，マルクスにより批判的に吟味された生産的労働論は，「資本の蓄積について，あるいは生産的および不生産的労働について」と題する章の中に展開されていた。その点からみて，スミスの生産的労働論の基本的位置づけははっきりしている。いわく，「製造上の労働は，一般に，自分が加工する材料の価値に，自分自身の生活維持費の価値と，自分の親方の利潤の価値とを付加する。これに反して，召使の労働はどのような価値も付加しない。……（製造工の）賃銀の価値は，一般に，自分が労働を加えた対象の増大した価値のうちに利潤をともなって回収される……。ところが召使の生活維持費はけっして回収されない」，と。[14)] ここでは，「価値を増加させる」労働が資本蓄積を与えるものとして位置づけられている。

ところが，つづいてスミスは，「回収」されるかされないか，との論点に

つなげていう。「製造工の労働は，ある特定の対象またはうりさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したりする……。……これに反して召使の労働は，ある特定の対象または売りさばきうる商品にそれ自体を固定したり実現したりはしない。かれのサーヴィスは……あとになってからそれとひきかえに等量のサーヴィスを獲得しうるところの，ある痕跡，つまり価値を背後にのこすということがめったにないのである[15]」，と。ここでは「価値を増加させる」か否かの論点が，「価値を生産する」か否かの論点と入れかわってしまっている。さらには，そこから進んで，労働が物に対象化するか否かの論点にさえ変化している。

後代からみれば区別さるべきこの論点も，スミスの頭の中では渾然一体をなしていたと思われる。価値を増加させて資本を支える労働，という卓抜した規定を柱としつつも，スミスにとって資本関係は文明一般であるし，文明にとって剰余生産物の存在は自明であり，私的所有もまた批判の余地ない前提であるから，価値を形成することも労働が物に対象化することも全く同一のことであり，したがって物をつくり出す労働が剰余生産物を，したがって剰余価値をつくり出すことも自明のことであったであろう。こうした特徴は，投下労働説と支配労働説とを渾然一体となしていた彼の商品価値論と軌を一にするものであろう。

3）マルクス『剰余価値学説史』，同前，216頁。
4）マルサス『経済学原理』小林時三郎訳，岩波文庫（上），49頁。
5）同前，49頁，52頁。
6）同前，52～59頁。
7）同前，58頁。
8）マルクス『経済学批判』，武田隆夫他訳，岩波文庫，318頁。
9）スチュアート『経済学原理㈠』中野正訳，岩波文庫，60頁，114頁。
10）デイドロ，ダランベール編『百科全書』，桑原武夫訳編，岩波文庫，252頁。
11）ヒューム『経済論集』田中敏弘訳，18～20頁，32頁。
12）マルサス，前掲書，56頁。
13）ロック『市民政府論』鵜飼信成訳，岩波文庫，32～33頁，37頁。

14) スミス『諸国民の富』,大内・松川訳, 岩波文庫, 第2分冊, 337頁。
15) 同前, 338頁。

三

マルクスは, そうした位置にあるスミスの理論をどのように承け継いだのであろうか。マルクスはスミスが価値増殖的労働をもって生産的労働だとなした先の文章を引いて吟味したのち, 次のようにのべる。「ここでは生産的労働が資本制的生産の立場から規定されるのであって, A・スミスは事態そのものを概念的に極めつくし, その的をいている。彼が生産的労働を直接に資本と交換される労働として規定したことこそは, 彼の最大の科学的功績の一つである。」「かようにして何が不生産的労働であるかも絶対的に確定される。それは, 資本とでなく直接に収入と……交換される労働である[16]」, と。マルクスは, スミスが生産的労働一般といったものではなく資本制的生産の立場からの生産的労働を規定したこと, 資本を資本たらしめるものとしての生産的労働を規定したこと, に最大限の讃辞を呈しているのである。

つづいてマルクスは, スミスによって与えられたいま一つの規定を批判してゆく。まずスミスは価値を形成することと価値を増殖することのちがいを忘れる。「ある労働者が, じぶんの労働により何らかの材料にたいし, じぶんの労賃において受けとったのと同等量の価値を附加することによって, 消費された価値のかわりに等価物を生み出すかぎりは, 生産的だといわれる。ここではわれわれは, 形態規定から, すなわち, 生産的労働および不生産的労働を資本制的生産にたいするその関係によって規定することから, 逸脱する」のである, と[17]。

つぎにスミスは, 一方では物に自らを固定させるような労働に, 物質的生産において直接に消費されるあらゆる知的労働を含め, 他方では不生産的労働は物に痕跡をのこすことが「めったにない」, つまり痕跡をのこすこともまれにはありうる, としながらも, 事実上, 生産的労働を物に対象化する労働と等置し, 不生産的労働をそうしない労働と等置している。ところが, たと

えば私の家にきてシャツを縫う裁縫女は工場の裁縫女工とまったく同じように「労働を物に固定させ」るのである。さらに劇場や女郎屋の企業者は，俳優や売春婦などの労働能力をかい，彼らの『不生産的労働』を「公衆に売ることによって，彼は労賃と利潤を回収する。」「要するに，このサーヴィスの生産が部分的には資本のもとに包摂されうるのと同じように，有用物に体化される労働の一部分は，直接に収入によって買われて，資本制的生産のもとには包摂されないのである」，と。[18)]

みられるように，ここでマルクスは，物に対象化する労働とそうでない労働との相違，物に対象化する労働と商品価値を形成する労働との相違，価値形成的労働と価値増殖的労働の相違，さらに資本に包摂される労働と包摂されない労働との相違，これらが相互に関連しながらも論理的次元を異にするものであって，生産的労働と不生産的労働との相違は価値増殖的労働か否かの相違としてのみ考察すべきである，と主張しているのである。そう考える私のマルクス理解をいま少し展開して説明してみよう。

まず，労働には物に対象化するものと，対人的サーヴィスのように物に対象化しないものとの区別がある。これは労働の内容あるいはその成果に関係することであって，労働の社会的形態には全く関係しないことである。いずれも人間的労働力の支出ではあるが，具体的有用労働の種差によって，成果としての生産物をうむものと，そうでないものとの区別がある。

次に，労働というからにはいずれも生理的エネルギーの支出，人間的労働力の生理的意味での支出であるが，その中には抽象的人間労働としてみとめられるものと，そうでないものとの区別がある。この区別は，物に対象化するか否かとは無関係である。抽象的人間労働の中には，物に対象化するような労働もそうでない労働も含まれ，抽象的人間労働としてみとめられないものの中にも，物に対象化する労働とそうでない労働とが含まれる。そもそも抽象的人間労働とは社会的労働の規定性であり，その労働が社会的総労働の一環たることを示すものである。抽象的人間労働とは，社会的分業がその上に展開しているその共通の同質的基礎のことである。余暇にスキーをしても，

母が子を保育しても，まさに具体的特殊的な関係だからこそ意味をもつのであって，社会的労働の一環でないかぎり，抽象的人間労働ではない。

さらに，抽象的人間労働の中にも，商品価値を形成するもの，すなわち凝固物となって社会的形態を与えられるものと，そうでないものがある。抽象的人間労働の中で物に対象化しうる部分が，社会的分業と私的所有という条件下で支出されたときに，商品価値を形成するのである。社会的分業とはいっても，そのいみは限定されており，つまり商品生産が行なわれているとき，ということであって，商品の消費費用として展開されたときには，サーヴィスのみならず，物に対象化する労働でさえも，商品価値は生まない。また，この場合，「労働の物質化等々を，A・スミスがとらえているようにスコットランド人的にとるべきではない。」場所の移動も，物そのものにおける労働の痕跡はみとめられないとしても，労働の物質化と考えるべきである。[19)]

最後に，単に価値を形成するだけの労働と価値を増殖する労働とが区別される。そしてこの，価値を増殖する労働のみが，資本制的生産を真に支える生産的労働なのである。資本制的ないみでのこの生産的労働には，何重にも社会的規定が加えられている。そもそも抽象的人間労働であるということが社会的である。価値形成的であるという点には特殊商品社会的という規定がある。価値増殖的であるということに，特殊資本制的であるとの規定があるのである。

こうした生産的労働によってひとたび資本が定立されるや，資本は種々の労働を附加的に自らの体系に組み入れはじめる。抽象的人間労働ではあるが商品価値を生まない労働種類の一部分は，サーヴィス業に乗り入れた資本によって，個別的にみれば生産的労働であるかのような形態を与えられる。これは，自ら商品価値をもたないものが，価格形態の成立により商品形態を与えられるのと同じい。また，価値を形成するのみである労働，たとえば小商品生産者の労働も，それらのつくり出す商品が資本の流通のなかに附加的に組みこまれるにつれて，同じく生産的労働であるかのような形態を与えられる。さらには，抽象的人間労働ではないような世界にさえ，資本制的な生産的労

働の影が及ぶ。子供たちの家事手伝いさえ賃労働化しかける。

マルクスはこのように考えていたと思われる。スミスに対するマルクスの批判の眼目は次の点にあることになる。一般に古典派経済学があたかも超歴史的に生産を支える，したがって社会一般を支えるようなものとして位置づけ論じていた生産的労働とは，スミスが慧眼にもみてとっていたように，資本の概念と不可分だったのであり，本当は，資本制的生産にとっての生産的労働，資本を支え，資本主義社会を支える生産的労働だったのであって，決して超歴史的なものではないのだ，と。マルクスは，いわゆる生産的労働論の超歴史的な外見にまどわされるな，と警告する一方で，いわゆる生産的労働をもって表象されている剰余価値を生み出す労働，この労働の社会的形態こそが，資本という生産関係を日々あらたに生成させているのだ，との唯物論的把握を成功させたのである。

こうしてみると，マルクスが『資本論』で展開していた生産的労働論，生産的労働の本源的規定と資本制的形態規定との関係の理解は，われわれにとって単純卒直なものであってよいように思われる。生産的労働の本源的規定とは，単純な労働過程の立場からするものであって，労働過程を一般にその成果から考察すれば生産物を目的とするものといえるから，こうした生産物を結果するように働く労働は生産的労働という位置づけを与えられる。これだけのことであれば，特別に云々すべきことはないではないか。資本制的な意味での生産的労働が，そうした生産的な労働の本源的規定を踏まえながら，これとはちがったもの，すなわち剰余価値をつくり出す労働という規定で考えられなくてはならないのは，資本制的生産の目的が生産物一般ではなく剰余価値であるからであり，さらに剰余価値の生産こそが資本を資本として日々再生させ，かくして資本制的生産を維持しているからである。この点にも，それ以上に何か難解なことがあろうか。生産的労働の二つの規定は，むりに重ねあわせてつじつまをあわせなくてはならぬ規定ではないのであって，二つの規定の関係は使用価値と商品価値だとか，労働過程と価値増殖過程とか，そうした諸規定間の関係と似たものなのではなかろうか。

われわれにとって反省すべき点は，二つの規定を一つのものとして理解するために苦労することではなくて，この二つの規定のそれぞれの歴史的限界性を吟味することであろう。本源的規定の方についていうならば，そこでは成果としての生産物の立場の限界性が，今日に必要なようにはのべられていない。人が物に化し，物が人に化して循環する過程の一段階としての生産物の立場が，ここでは固定されている。はたして地球を汚物溜にするような生産物を目的とおきつづけてよいのであろうか。労働が労働力の発展にプラスの作用を及ぼすのではなく，反対に「労働の貧困化」などとも表現されるような関係の中で，かえって労働力を破壊するような労働が展開するとしたら，それでもなお生産物の立場から生産的労働を謳歌しつづけてよいであろうか。資本制的形態規定についていうならば，サーヴィスのように物質化しない労働領域が次々に資本の形態にとりこまれているなかで，すでに商品価値は抽象的人間労働そのものとなり，なにもとくにその物質化・対象化でなくてもよい，といった段階にうつっていると考えてよいのであろうか。やはり資本の概念の基礎には価値増殖的労働があり，商品価値は抽象的人間労働の対象化でなくてはならないのではないか。この問題は，すでに金が廃貨しているかいないか，といった問題と同類なのではあるまいか。

とはいえ，次の点を指摘しないでは，『資本論』における生産的労働論の魂がぬけてしまうであろう。マルクスがスミスを批判的に承け継ぎつつも，決定的にこれを克服するのはいわゆる「領有法則の転回」論である。スミスは，価値を増加させる労働という把握において資本と生産的労働とを結びつけながらも，大きくロック的傾向の中にあった。すなわち，私の労働は私のものだから，その結果も私のものだ，と。マルクスは，価値増殖的労働の概念に立脚して，資本制的生産の真実を表現する。資本は，他人の労働をもって他人の労働を吸いとり，これを自らのものとする生産関係である。資本制的な生産的労働とは，労働者が自分の労働力の支出をもって，他人の力である資本をつくり出す労働のことである。ロック的な私的所有論は，資本制的生産にはあてはまらない，と。

このように質的規定性において生産的労働を考察するならば，多くのウクラッドの複合である現実の国民経済について国民所得を考えるには，いくつかの媒介が必要であるように思われる。まず，もっとも狭く，資本を直接に支える生産的労働により産出された商品資本が，そういうものとして使用価値面と商品価値面とから計測されうるであろう。その中には，若干の公共セクターの生産物が含まれるであろう。残余は不生産的労働である，とおくこともできるであろう。しかし，現在の独占資本支配下の経済においては，単純な商品生産部門も，そこで産出される剰余生産物が独占利潤の一部として吸収される形で，あるいは逆に，社会政策的出費を伴う形で，資本を維持しまた資本に維持されている。とすれば，そこにおける純生産物も，使用価値面および商品価値面から計測されなくてはならないであろう。ここには，より広い生産的労働概念が成立する。もっとも，社会的平均労働でみての必要労働部分さえ産出しえない部門は，広義の生産的労働にも入らないかも知れない。

次に，内在的には商品価値をもたないが商品形態を与えられている抽象的人間労働部分，すなわちサーヴィスが問題となる。ここにも資本制的なものと単純商品生産的なものとの区別がある。これら抽象的人間労働量の計測にあっては，単純商品生産的サーヴィスがどの程度労賃の法則に支配されているのか，逆に労賃が監督賃銀からサラリーマン重役の報酬まで連続することにより，どの程度本来のそれから離れているか，などが問題であろう。所詮商品価値を形成していないとはいっても，社会的労働とその成果を考察するためには不可欠である。さらに，社会的労働の一環とはなっていないが，可能的にはそうである人間的労働力の予備の計測も派生的に必要になろう。社会的な総労働日と余暇とへの労働力機能の配分，「労働力」と「非労働力」とへの生産年令人口の，さらには総人口の配分。問題のすそ野はかく広がる。

いったい労働者が生産的労働者であるということは，当の労働者にとって何を意味するのであろうか。生産的労働者であるということは，どのようないみで当の労働者にとって誇りであるべきなのか。不生産的労働者であるこ

とは，当の労働者にとってのひけ目の根拠なのであろうか。

生産的労働者は直接に搾取されている。労働者のもつ潜在的な諸不満がこうした命題に基礎づけられるや，労働者の意識は賃銀斗争への強い意欲を支えるものに変貌しうる。しかしその段階では，賃銀生産力説，成果配分説との分離は未だ確定的ではない。搾取されていないものまで取りかえすことはできないではないか？さらに，直接に搾取されていない不生産的労働者はどうしたらよいのか。直接に搾取されてはいないが，彼らの低労働条件をつうじて不生産的部門の資本が剰余価値の配分にあづかっているのだ。だが，不生産的部分は，その労働者をも含めて生産的労働者の重荷だということになるのではないか？

こうした位置づけは，経済的斗争の進展のなかで事実上くずれている。不生産的労働者にとって，自分の労働力が具体的にどのように支出されるかは，資本の責任の問題である。より重要なのは，彼らが，全般的な労働市場のなかで，生産的労働者とともに一群のプロレタリアートを形成している，ということである。生産的労働者にとっても，さしあたり自らの労働力支出の成果として生産されるものは反社会的な公害物質であって，世の指弾を浴びたりしたりしている。とすれば，生産的労働者であるということの意味はどういうことになるのか。

生産的労働者の社会的役割は，生産的労働の概念から展開される。資本制的意味での生産的労働は剰余価値をつくり出して資本を支える労働である。とすれば生産的労働者とは，自らの労働によって彼が意図するとしないとに拘らずに資本を日々生成させ，かくすることによって資本制的社会をその基礎において支えているもののことである。生産的労働者とは，資本主義の人柱である。彼は自分の労働と生活の苦痛に耐えることにより，ほかならぬ自らの圧制者たる資本を維持する。こういうものとしての生産的労働者は，決して，資本に対抗するものとしての賃労働者の誇りの対象ではありえない。しかし，問題を裏面からみるとどうなるのか。生産的労働者の労働の現場における労資の対抗は，資本そのものの危機を内包している。生産的労働者の

決定的反抗は，資本という社会関係を決定的に揺がすのである。自分たちの行動こそが資本制的生産の命運を決するのだという責任の自覚，ここにこそ生産的労働者の誇りの根拠があるといえよう。

16）マルクス『剰余価値学説史』，前掲書，216頁。
17）同前，223頁。
18）同前，226～230頁。
19）同前，237頁。

四

生産的労働の概念と生産的労働者の役割についての上述の規定は，何度も繰り返したように，資本制的生産にとっての生産的労働の規定であり，したがって資本制的生産の否定者としての，その意味で消極的な生産的労働者の役割である。資本制的生産の否定のうえに次のあたらしい社会を生成させるにあたっての労働と労働者の役割の問題は，これまでの生産的労働論とは別な視角から，労働の社会化論とか社会主義労働論の視角から研究する必要がある。

資本は私的所有の形式のもとで次第に社会的生産を発展させる。協業と分業とが資本のもとに展開されることにより，直接的な集団力としての労働力結合が，労働の社会化が，発展する。直接的な集団力として労働力が機能する条件として，生産手段のますます大なる部分が労働過程において共同的に消費されるようになる。賃労働者たちは，そうした条件下におかれた日々の労働の中で，自発的に社会的生産を組織しうる能力をもった労働者階級へと陶冶されてゆく。[20]

資本という形式下での労働の社会化は，しかしながら，社会化されつつある労働が資本の生産力として現われる，といったものであり，賃労働者たちの集団的活動の成果は資本家的に私的に領有される。労働者の集団は資本専制によって組織されるのであって，その支配は，労働市場における賃労働者

間の競争を労働者の生産現場における集団にも滲透させ，これによって分割し統治するやり方である。職場における労働者民主主義の展開は，「経営権」を蚕食し，資本の危機を深めるから，これの指導者は資本の眼からすれば不生産的労働者どころか「生産の阻害者」である。

資本は，商品価値に立脚しながらも，次第にそれ自身商品価値をもたないものにも商品形態を成立させ，社会的生産の密度をつよめてきた。諸々のサーヴィスが商品の形態をとるようになり，物的な財貨でさえも，その生産から最終的消費に至る過程は，ますます淵のない流れに近づいてゆく。抽象的人間労働一般と，これが対象化した商品価値との区別は重要性を失ないつつある。またその一方で，商品の使用価値一般も，物質界における質料的大循環の中の人間生活の観点から反省をせまられるようになっている。

とはいえ，資本という形式下での社会的生産の発展は，あくまでも生産物という局面を中心軸として展開する。土地と労働力という二大本源的生産要素は，商品価値および商品の一属性としての使用価値の犠牲に供される。

では，富が資本制的形態を脱却し，生産が資本制的形態を脱却し，社会的生産の何らかあたらしい形態（社会主義さらには共産主義として展望されているところの）が形成されてゆく過程で，生産的労働はどのように把えなおされることになるのであろうか。この点を予想してゆく場合にも，本源的規定と特殊社会的形態規定の区別が必要であろう。まず本源的規定の方からみてゆくことにする。さて，そこではすでに富は商品の集成でも一般に生産物の一大集成でもないであろう。生産物をも含む人間生活が物質界における質料的大循環から反省されたうえで，生産物をも含めて自然の絶えざる人間化と，これを背景にした人間の自然の発展，その中心をなす人間的労働力の能動的な働きの発展こそが，富そのものと目されるにいたるであろう。生産物に固定化する労働と，そうでないサーヴィスとの区別は重要性を失なうであろう。それとともに，生産物とサーヴィスの有用性が，個別的にではなく，諸生産物・諸サーヴィスの諸有用性の総体の中に位置づけられた上で，全体的に評価されるであろう。薬がゆきすぎて毒になったり，利器がゆきすぎて

凶器となったりする傾向は，厳しく批判されるであろう。労働の能力と，これと結びついた享受の能力の発展が，第一の基準となるであろう。社会的人間の労働力の発展にプラスする労働力の支出こそが，本源的な意味での生産的労働といわれるであろう。

その生産物あるいはサーヴィスの有用性が社会適合的であるのか反社会的であるのかの判定基準を，労働力の発展に積極的に作用するかどうかにおいたとしても，しかし，その基準による判定自身はすでに社会的行動たらざるを得ないであろう。自覚的な社会的行動は，決して人間の歴史的発展のすべてを見透した上でものにはなりえない。「反社会的」なものの規制は，ある部分は画一的な基準でなされるであろうし，ある部分は諸個人の自由意志を尊重した上での誘導によってなされるであろうし，「社会適合的」なものの内容も，具体的には，諸個人の選択の幅が，狭くあるいは広く設定されるであろう。そして，「社会適合的」な労働であったとしても，その社会の諸個人が狭義の余暇においてなすべきことと予定される諸活動と，全体としての社会的総労働の一部分としてあり，そこにおいては厳格な計画と統制と管理がなされているような諸活動との区別がないわけにはゆかないであろう。もちろん，そうした社会的総労働の一部としてあっても，内部における自由の発展は不可欠である。分業すなわち「労働の分割」と，分割によってつくり出された各特殊的労働への各労働力の固定的配分ないし割り付けとは別のことである。だから，固定的分業の克服は，分業一般や協業の克服ではない。

こうして，あたらしい社会の生成発展という視角からみた生産的労働，生産的労働のあたらしい社会的形態規定の問題があらわれてくる。あたらしい生産的労働は，その労働によって労働の集団性がますます強化するような労働でなくてはならない。協業と分業の中で展開されながら，労働者民主主義に支えられ，ますます労働者集団の結合をつよめる労働でなくてはならない。そして，労働者民主主義が開花しうる条件は，資本専制の物質的基礎であったところの，共同的消費の対象たる生産手段の資本家的な私的所有を否定することであった。集団的労働が展開しうるのは，その共同的生産手段を共同

的に所有しているからであった。あたらしい意味での生産的労働は，自分たちの剰余労働をますます急速に共同的生産手段の形で集積してゆく労働でなくてはならない。共同的生産手段には，狭義の労働手段のみならず，土地をも含めて考えるべきであろう。あたらしい社会は，あたらしい生産的労働に日々支えられてこそ，自らを日々あたらしく生成しつつ，やがて磐石の基礎をうるであろう。

社会主義労働論は，社会主義における労働の特徴を考察するばかりではなく，社会主義的生産を支え，あるいは社会主義的生産を日々生成させるものとしての労働を考察の対象としなくてはなるまい。そうした位置にある社会的労働の独自な歴史的性質を吟味しえたときに，アダム・スミス的な生産的労働論に立脚した，古典派経済学にはじまる資本制的生産に即した経済学を克服し，労働を「土地」や「資本」とならぶ稀少な資源の一つとしか見ない所謂近代経済学を克服し，あたらしい社会主義経済学が可能になるであろう。こういったからといって，わたしはいま，社会主義経済学の端緒概念について論じているわけではないし，ましてや社会主義経済学の体系について論じようとしているのでもない。小論のまとめを，若干の理論的展望の形で与えようとしているだけである。

あたらしい生産的労働概念との関係で社会主義労働を考えようとすると，かつてのブハーリンやプレオブラジェンスキーの議論があたらしい位置づけを受けるように思われる。ブハーリンの考え方は，ひろく知られているように，「比例的労働支出の法則，または『労働支出法則』は，あらゆる社会的，歴史的構造における社会的均衡の必要条件である。それはさまざまの『現象形態』をとり得る。なかんずく商品社会においてそれは価値法則の物神的衣服をまとう」，というものだが，事実上，「労働支出法則」の価値形態以外の形態を追跡はせず，「社会主義的・計画化原則の勝利の過程は，労働支出法則がその罪で汚れた価値の衣服を脱ぎすてる過程，すなわち価値法則が労働支出法則へ転化する過程」だとするのである[21]。価値法則にかわるあたらしい社会的形態は研究されることなく，均衡のみ注意されて，どんな労働が新社

会を維持・発展させるのかは，問題提起もされない。

プレオブラジェンスキーはブハーリンとは異なり，社会の剰余生産物をどこに集積し，どのような生産関係の優勢のもとに生産力を発展させるか，という問題をはっきりとたてていた。しかし，ソヴェト政権成立期の特殊事情を反映して次のように考えたのである。「社会主義的蓄積」とは骨格の固まった社会主義経済の内部において創出され……拡大再生産に役立つような剰余生産物部分が，機能中の生産手段に加えられることをいう。これに対して，社会主義的原始蓄積というのは，国営経済全体の外部に存在する給源から，主にあるいは同時に供給される物的資源を国家の手中に蓄積することをいう。」この原始蓄積法則の作用によって「今日の国営経済は，もし価値法則が作用するという条件のもとにおいてならば倒産してしまうような企業を支え発展させている」，と。[22]「社会主義的原始蓄積」が展開されている中でも，なお新社会の軸心として作用しているはずの「社会主義的蓄積」の研究はプレオブラジェンスキーにおいて停止してしまっているし，農民経営が集団化の道によって社会主義的なものに変容する見透しも与えられなかった。あたらしい生産的労働論なしには，社会主義建設におけるプロレタリアートのヘゲモニーは理論化しえないであろう。

生産手段の社会的所有は，剰余生産物社会化の条件でもあり結果でもある。生産手段が社会的に所有されてはじめて，剰余生産物の私的領有は決定的に規制されうるし，剰余生産物がたえず社会的なものとして生産されてはじめて，生産手段の社会的所有は安定しうる。生産手段の社会的所有が深化し，ますます全人民の利害に一致してはじめて，剰余生産物の社会化も深化するであろう。その過程で，特定の生産手段を占有する労働者グループと全人民の利害対立も調整されてゆくであろう。

生活手段の一部の社会的管理は，必要生産物の一部の社会化の条件でもあり結果でもある。有効な社会的管理は必要生産物の社会化を推進し，必要生産物の社会化によって，生活手段の社会的管理が推進される。そのなかでこそ，労働力そのものの社会的性格が深化し，自己の労働を自己の私有財産の

根拠たらしめようとする傾向が[23]，次第に克服されてゆくであろう。あたらしい生産的労働は，剰余労働と必要労働とにますます社会的性格を付与しつつ，生産物を社会的なものとして産出し，そうすることによって自己を社会的なものとしてゆくような労働であろう。

20) 富沢賢治『唯物史観と労働運動』,61～62頁。64頁。拙著『価値法則と賃労働』第3章。
21) ブハーリン「過渡期の法則性に関する問題に寄せて」,プレオブラジェンスキー，救仁郷繁訳『新しい経済』405頁，408頁。
22) プレオブラジェンスキー，同前，113～114頁，39頁。
23) 拙稿「複雑労働論再論」『唯物論』(札幌唯物論研究会) 第23号，参照。